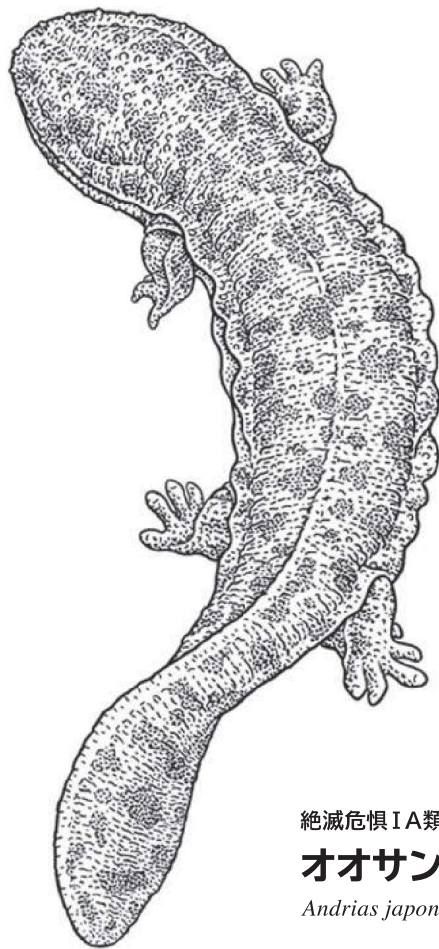


両生類



絶滅危惧IA類 (CR)

オオサンショウウオ

Andrias japonicus

両生類概論

● 爬虫類・両生類分科会／江頭幸士郎・川原二郎・橋元浩一・菊水研二

■ 概要

福岡県産両生類のレッドデータブック掲載種選定にあたり、爬虫類・両生類分科会では県内で継続的な繁殖記録のあるもののうち、明らかに近代定着したとされる外来生物を除いた全種を評価対象とした。県内に分布する両生類に関連して、特に有尾目の小型サンショウウオ類は近年のDNA解析を中心とした研究により種分類が再編成されている最中にある（例えばMatsui et al., 2019; Tominaga et al., 2019; Sugawara et al., 2022）。一方で、小型サンショウウオ類については過去にも、種が細分されたのちに、より詳細なDNA解析により統合されたり、再度分割された例がある（例えばNambu, 1991; Matsui et al., 2002）。また、近縁種では外部形態で識別することが事実上不可能に近い場合があるなど、本稿執筆時点では県内に生息する確実な種数を把握することが困難である。今回の改訂においては、2023年12月15日版の日本爬虫両棲類学会の日本産爬虫両生類標準和名リストに掲載されているものを現時点で有効な名義種であるとみなしたうえで、必要に応じて標本のDNA解析による種同定も行うなどし、可能な限り実態に即した種分類に基づく評価を試みた。小型サンショウウオの種分類は今後もしばらく変遷が続くものと予想されるが、上記リストに基づけば、県内に分布する在来両生類は有尾目6種、無尾目10種の合計16種である（福岡県両生類目録。無尾目の外来種ウシガエルを除く）。日本全体に生息する在来両生類は有尾目56種、無尾目48種であるため、福岡県には日本産有尾目の10.7%、無尾目の20.8%が分布していることになる。

今回選定した両生類は絶滅危惧IA類1種、絶滅危惧IB類1種、絶滅危惧II類5種、準絶滅危惧5種の合計12種で（新旧対照表を参照）、全体としては1種増加しているが、これは前回改訂以降に独立種として記載されたチクシブチサンショウウオが新たに選定されたためである。前回から今回までの間の種の生息状況の変化が評価された結果、いくつかの種ではカテゴリーが変更されている。カテゴリーが下方修正された種もあるが、これは個体群が回復したことを意味するわけではなく、前回評価時やそれ以前に縮小した個体群が小さい規模のままではありながらも、今のところ安定しつつあると評価されたためである。県内に生息する在来種のうち75%が何らかの形で選定されていることとなり、絶滅危惧種のみに限っても43.8%に当たることから、前回評価時と同様に県内の両生類は全般的に減少傾向にあると言わざるを得ない。

最も絶滅危険性の高い絶滅危惧IA類のオオサンショウウオは、かつては県内各所で記録されており、少なくとも一部の水系では繁殖もしていたと考えられるが、複数回の現地調査および環境DNA調査のいずれにおいても現存を確認することができなかった。本種は前回の改訂にかかる調査でも野生個体を確認することができていないため、県内からはすでに絶滅してしまった可能性があるが、一方で陰性的な生態を持っていることと長寿であることを考慮すると、僅かに生き残っている可能性も拭いきれない。そのため今回は前回と同じカテゴリーのまま掲載するが、確実に野生個体であると考えられる個体の記録は1990年代が最後であり（倉本, 2002）、仮に次回の

改訂時にも発見できなかった場合は、県内では野生絶滅したと判定すべきかもしれない。

■ 選定基準

選定にあたっては、対象種全種について県内の分布情報を収集し、個体群の減少の程度、生息地面積あるいは現存個体数などを基準として絶滅が危惧されるか、その場合どのカテゴリーに当てはめるのが適当かを判定した。各基準の評価においては検討委員会で提示された評価指標に可能な限り準じたが、世代時間の不明な種が多いため経時的減少を評価する際の期間はどの種についても10年間に統一した。また、両生類は他の陸上動物と比べて全般的に移動分散能力が低く、さらに繁殖場所付近で確認されることが多いため、今回確認された地域は便宜的に大部分が“生息地”であるものとみなし、分布面積に基づく評価においては“出現範囲”の項目を使用しなかった。いずれの基準も満たさなかった種については原則的に、個々の状況に応じ準絶滅危惧、情報不足あるいは選定外と判断した。

各種の分布状況の収集にあたっては分科会委員や調査協力者による現地調査のほか、ヒアリング、各種文献調査、環境アセスメントなどの報告書情報の集約を行った。ただし、文献や報告書の調査に当たり、種同定の正確性が疑われる記録については最終的な評価材料から省いた。現地調査では成体、幼体、幼生、卵、鳴き声などの情報源を区別するとともに、可能な範囲で確認個体数を記録し評価の参考にした。また、前回の改訂にかかる調査で現存することを確認できなかったオオサンショウウオについては、現地調査とあわせて一部地域を対象に環境DNA調査を実施した。種同定の難しい小型サンショウウオについては、一部検体を対象にDNAバーコーディングによる種同定も併用した。その他、形態による種同定にあたっては松井・前田（2018）、日本爬虫両棲類学会（2021）などを参考にした。

■ ハビタット

両生類は水域で産卵し、幼生時はそのまま水域で成長するが、変態するとオオサンショウウオ以外は少なくとも一時的に陸域で生活する。ただし、陸に分散して以降の両生類のハビタット利用については種ごとに不明な点が大きく、今回は主に繁殖環境、幼生の成育環境およびその周囲を各種の生息環境とみなして評価した。

(1)水田、湿地

水田は人為的な環境ではあるが、両生類各種の繁殖や成育に適した湿地・草地・小河川状の環境を連続的に提供する、現代においては重要なハビタットである。水田本体は浅い水深により、十分に高い水温と溶存酸素量が確保される。水が浅いことで大型魚類などの捕食者の侵入が妨げられ、また日当たりがよいため光合成による藻類などやそれを食べる小動物類の増殖が盛んで、これらは水中生活期の両生類の良好な餌となる。やがて陸上生活に移行する段階になると畔や周辺の水路などが理想的な上陸直後の成育環境を提供し、さらに本格的な陸上生活を始めるにあたっては隣接する草地や林地が好適なハビタットとなる。また田に水を巡らす水路は、緩やかな流れと水田本体よりやや深い水深を提供することで、そのような環境をより好む種にとって良好な生息環境となる。ただし、前回改訂時から指摘をされている通り、連続通水ではなく中干しを行う農法の普及や水路、畔のコンクリート護岸化・暗渠化、そもそも水田の放棄や稲以外の作物への転換などにより、上記のような両生類の成育に理想的な水田環境は減少している。中干しによ

り水中で成育中の両生類が乾燥死したり、コンクリート護岸の水路に流出することで生存できずに死滅してしまったとみられる事例は頻繁に確認される。これは水田を利用する多くの両生類、特に長い幼生期間をもつ種のカエル類やアカハライモリなどにとって大きな影響であることは間違いない。また冬季の休耕期には通水しない環境が増えたことで、この時期に産卵するニホンアカガエルやヤマアカガエルなどは生息が困難になっている。一方、ニホンアマガエルやヌマガエルのような夏季に卵を分散して産卵し、かつ幼生期間の短い種のカエル類は、このような環境下で数を減らしつつも存続できているようにみえる。

このような状況から、環境が改変された平地部の水田周辺ではニホンアマガエルやヌマガエルが優占し、両生類の成育に適した環境の残る丘陵や山の辺縁、山間部の水田周辺には、これらに加えトノサマガエル・ツチガエル・各種アカガエル類・シュレーゲルアオガエル・アカハライモリなどの平地では数を減らした両生類各種が比較的多くみられるという傾向がある。

淡水湿地もまた各種両生類にとって好適なハビタットであるが、純粹に天然の湿地自体が土地開発などですでにかなり減少している。ただし、丘陵・山間部を中心に耕作放棄された水田跡が湿地環境へと移行している場所は少なからずみられ、そうした環境では上記の両生類に加えニホンヒキガエルやカスミサンショウウオなどが繁殖する。特に、天然の水源に由来する放棄水田は年間を通して水温が低めで、ニホンアマガエルやヌマガエルの成育には適さない一方、カスミサンショウウオのような止水産卵性サンショウウオにとっては良好なハビタットとなっている。ただし、こうした環境はあくまでも遷移途上で一時的に形成されている可能性があり、将来的により遷移が進むことでハビタット自体が失われてしまう可能性がある。

こうした湿地状の環境を利用する両生類にとっては、環境そのものの変化以外に、外来生物による影響も心配される。特に、すでに県内の広域に定着している北米原産の外来生物アライグマは、浅い水深で両生類やその卵などを捕食することが各地で報告されており、特に早春期に繁殖する両生類にとっては大きな脅威となり得る。またアカハライモリなどの有毒で本来なら捕食者に忌避されがちな種についても、行動的な適応により捕食可能であることが知られている。県内のアライグマは、前回改定時には記録の乏しかった県北端部でも近年頻繁にみられるようになる（例えば馬場，2022）など、着実に個体群が増大しており、両生類を含む在来生物への悪影響がますます懸念される。

(2)ため池、クリーク

各種のため池は、かつては在来両生類のハビタットになっていたと思われるが、現在では外来種のウシガエルが広範に優占している。平地ではこれに加えてニホンアマガエルなどが、山地ではニホンヒキガエルやアカガエル類などが繁殖しているが、特に近年造成されたため池では、やはりウシガエルが最も多くみられる。ただし、より古い時代に造成された、概して水深の浅い部分が多くあるため池では、在来種が比較的多く生息している傾向にある。クリークではニホンアマガエルやヌマガエルがみられるが、やはりウシガエルも侵入している。特に沿岸部に近いクリークでは塩分濃度や水温の影響からか両生類は繁殖しないことも多いが、例外的にヌマガエルはこうした環境でも繁殖している場合がある。

(3)河川

河川の下流から河口部では両生類は生息しない場所が多く、例外的に河川の氾濫部で少数なが

らヌマガエルが繁殖する程度である。中流部の河原や氾濫原などでは、ニホンアマガエルやツチガエルなどが局所的に繁殖している場合がある。上流部ではカジカガエルが繁殖するほか、氾濫した止水部ではツチガエルやヤマアカガエル、ニホンヒキガエルなどが繁殖する。魚類もほぼ生息しないような源流部に近い上流域では、チクシブチサンショウウオやブチサンショウウオが繁殖し、源流部そのものや湧水地ではタゴガエルやコガタブチサンショウウオが繁殖する。このほか、こうした水源から溢れた水で形成されたほぼ止水に近いハビタットでは、平地・山地を問わずアカハライモリが生息している。

(4)山地

山地は多くの両生類にとって非繁殖期の生息地として重要である。ニホンヒキガエル、ヤマアカガエル、タゴガエルなどは非繁殖期にも山地の林床などで多くみられるほか、ウシガエルの若齢幼体やトノサマガエルなども、河川に沿って山地まで登ってきたとみられる個体がいる。調査で確認される例は多くないが、カジカガエルも非繁殖期はこうした山地で成育していると考えられる。また、ブチサンショウウオ、チクシブチサンショウウオ、コガタブチサンショウウオなどの溪流から源流部で繁殖する有尾目については、その周辺の山地が主要な成育場所になっていると考えられる。こうした成育地となる山地と、繁殖場所となる水域との接続が、多くの両生類にとって重要な成育条件になっていると考えられるが、河川のコンクリート護岸化やダムによる物理的障壁あるいはダムに起因する水底堆積物の増加などが、こうした成育—繁殖ハビタットの片方・両方の質的低下を引き起こし、それらの接続を妨げてしまっている。また、成育と繁殖に際して中流から上流域を行き来するオオサンショウウオのような両生類にとっては、ダムや堰の建設による遡上の阻害や水底間隙への砂泥の堆積は致命的な悪影響となりえる。

■ 保全対策

道路や宅地などの開発において、その場所に生息する両生類へのネガティブな影響はどうしても避けがたい。また、水田などの所有者の高齢化や後継者不足などにより、耕作放棄地が今後も増え続けることは予想に難くない。そうした中で、人間活動のために必要な土地開発や農地転換と両生類各種の存続にかかる保全対策との可能な範囲での両立が望まれる。特に在来両生類の多くは、水域面積や水深がそれほど大きくない環境を好むという点で、大多数の魚類や鳥類とはハビタットの選好性が異なる。またそのような環境は、人間にとってあまり有効な活用法がなく、土地開発の対象になりやすいように感じられる。国有地やOECM (Other Effective area based Conservation Measures, その他の効果的な地域をベースとする手段) などを活用し、複数の両生類相やその他生物群をエリア単位で包括的に保全するような取り組みが有効であると考えられる。

一方で、開発などによる環境改変とは別に、新興の外来種や感染症による在来両生類への悪影響も懸念される。外来のラナウイルスやカエルツボカビ・イモリツボカビによる感染症は、いまのところ野生の在来両生類への影響は限定的なようであるが、日和見的に感染が拡大する懸念は依然としてあるため注視する必要がある。また、県内で広域に定着している北米原産の外来種アライグマについては、国内外で在来両生類に大きな悪影響を与える事例が報告されており、アライグマ自体の防除促進や両生類の繁殖個体、卵がアライグマに食害されにくいようにするための工夫などを実践することが望まれる。また、近年ではインターネットオークションなどを介して、無視し難い規模の野生両生類のペットトレード拡大が懸念されている。こうした問題は必ず

しも県内だけで有効な対策ができるとは限らないが、まずは普及啓発によって県民にもこうした問題に関心を持ってもらい、飼育生物の野外への放出をしないこと、感染症や外来種被害の早期発見、防除への理解、過度の採集への自制などを呼びかけ続けることが重要であると考えられる。

■ 調査協力者名

井上大輔, 井上哲也, 鵜川 亮, 江頭修志, 太田喜視, 越智慎平, 北九州市立自然史・歴史博物館友の会, 九州両生爬虫類研究会, 熊谷拓時, 倉本 満, 西藤誉志也, 鈴木 大, 鈴木由香, 芹野政勝, 武石全慈, 武田晋一, 谷口愛佳, 中島 淳, 中津元樹, 中野紘一, 中野康子, 永野昌博, 西野友子, 廣田知良, 藤田宏之, 松枝(吉村)友里, 松隈明彦, 山住従容, 吉森安英

■ 写真提供者名

鵜川 亮, 江頭幸士郎, 川原二郎

■ 参考文献

- 馬場三男. 2022. 山田緑地の哺乳類 緑地にキツネがいました. わたしたちの自然史, 156: 20–26.
- 倉本 満. 2002. 福岡県の両生類相研究史. 両生類誌, 8: 1–11.
- 松井正文・前田憲男. 2018. 日本カエル大鑑. 文一総合出版, 東京.
- Matsui, M., Okawa, H., Nishikawa, K., Aoki, G., Eto, K., Yoshikawa, N., Tanabe, S., Misawa, Y., & Tominaga, A. 2019. Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. *Current Herpetology*, 38: 32–90.
- Nambu, H. 1991. *Hynobius tenuis* (Caudata, Hynobiidae), a new species of salamander from central Japan. *Zoological Science*, 8: 991–997.
- 日本爬虫両棲類学会. 2023. 日本産爬虫両生類標準和名. 日本爬虫両棲類学会, 京都.
- 日本爬虫両棲類学会(編). 2021. 新日本両生爬虫類図鑑. サンライズ出版, 滋賀.
- Sugawara, H., Tahara, Y., Nakazono, S., Matsukoji, T., & Nagano, M. 2022. Taxonomic revision of the Yamaguchi salamander *Hynobius bakan*: Description of two new species from Chugoku and Kyushu, Japan. 横須賀市博研報(自然), 69: 1–17.
- Tominaga, A., Matsui, M., & Nishikawa, K. 2019. Two new species of lotic breeding salamanders (Amphibia, Caudata, Hynobiidae) from western Japan. *Zootaxa*, 4550: 525–544.

表 両生類-1 新旧カテゴリー対照表

	福岡県RDB2014のカテゴリー							再選定種数※	追加種数※	掲載種数※
	絶滅	野生絶滅	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IB類	絶滅危惧II類	準絶滅危惧	情報不足			
今回のカテゴリー	絶滅							0	0	0
	野生絶滅							0	0	0
	絶滅危惧IA類			オオサンショウウオ				1	0	1
	絶滅危惧IB類					ヤマアカガエル		1	0	1
	絶滅危惧II類				トノサマガエル	カスミサンショウウオ ニホンヒキガエル ニホンアカガエル	アカハライモリ	5	0	5
	準絶滅危惧					コガタブチサンショウウオ	ブチサンショウウオ ツチガエル カジカガエル	4	1	5
	情報不足							0	0	0
(合計)							11	1	12	

上位のカテゴリーに移行
 下位のカテゴリーに移行
 カテゴリー変更なし

	福岡県RDB2014のカテゴリー							合計種数
	絶滅	野生絶滅	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IB類	絶滅危惧II類	準絶滅危惧	情報不足	
今回除外した種※								0

今回追加した種	
絶滅	
野生絶滅	
絶滅危惧IA類	
絶滅危惧IB類	
絶滅危惧II類	
準絶滅危惧	チクシブチサンショウウオ
情報不足	

※ 再選定種数 …福岡県RDB2014の選定種のうち、今回（福岡県RDB2024）でも再び選定した種の数。
 追加種数 …福岡県RDB2014の選定種以外で、今回（福岡県RDB2024）において新たに選定した種の数。
 掲載種数 …福岡県RDB2024に選定した種の数。（「再選定種数」と「追加種数」の合計）
 今回除外した種…福岡県RDB2014の選定種のうち、再評価の結果、今回（福岡県RDB2024）は選定しなかった種。

表 両生類-2 福岡県両生類目録

目名	科名	種 名	
有尾目	オオサンショウウオ科	オオサンショウウオ	<i>Andrias japonicus</i> (Temminck, 1836)
	サンショウウオ科	カスミサンショウウオ	<i>Hynobius nebulosus</i> (Temminck et Schlegel, 1838)
		コガタブチサンショウウオ	<i>Hynobius stejnegeri</i> Dunn, 1923
		チクシブチサンショウウオ	<i>Hynobius oyamai</i> Tominaga, Matsui et Nishikawa, 2019
		ブチサンショウウオ	<i>Hynobius naevius</i> (Temminck et Schlegel, 1838)
	イモリ科	アカハライモリ	<i>Cynops pyrrhogaster</i> (Boie, 1826)
無尾目	ヒキガエル科	ニホンヒキガエル	<i>Bufo japonicus</i> Temminck et Schlegel, 1838
	アマガエル科	ニホンアマガエル	<i>Dryophytes japonicus</i> (Günther, 1859)
	アカガエル科	タゴガエル	<i>Rana tagoi</i> Okada, 1928
		ニホンアカガエル	<i>Rana japonica</i> Boulenger, 1879
		ヤマアカガエル	<i>Rana ornativentris</i> Werner, 1903
		ツチガエル	<i>Glandirana rugosa</i> (Temminck et Schlegel, 1838)
		トノサマガエル	<i>Pelophylax nigromaculatus</i> (Hallowell, 1861)
		ウシガエル	<i>Lithobates catesbeianus</i> (Shaw, 1802)
	ヌマガエル科	ヌマガエル	<i>Fejervarya kawamurai</i> Djong, Matsui, Kuramoto, Nishioka et Sumida, 2011
	アオガエル科	シュレーゲルアオガエル	<i>Zhangixalus schlegelii</i> (Günther, 1858)
カジカガエル		<i>Buergeria buergeri</i> (Temminck et Schlegel, 1838)	

植物群落

植物等

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類

昆虫類

甲殻類等

クモ形類等

貝類

オオサンショウウオ

Andrias japonicus (Temminck, 1836)

絶滅危惧ⅠA類(CR)

2014
絶滅危惧ⅠA類環境省
絶滅危惧Ⅱ類

選定理由 県内各所で発見事例は散発的にあるものの、確実に繁殖していたと考えられるのは赤村の十津川にほぼ限られる。ただし近年捕獲例はなく、2014年改訂時の調査に続いて、2024年改訂時の調査でも個体を発見できなかった。堰やダムによる遡上の阻害や、土砂による産卵巣穴の埋没などが減少要因になったと考えられる。既に県内からは絶滅してしまった可能性もあるが、陰性的な生態と長寿であることを考慮し、現時点では絶滅危惧ⅠA類とする。

危機要因 森林伐採、河川開発、ダム建設、水質汚濁、産地局限

分布情報 赤村(今川水系十津川)

種の概要 最大で全長150cmに達する世界最大の両生類。夜行性が強く、昼間は巣穴や岩の下に潜んでいる。産卵は晩夏から初秋に河川の横穴の繁殖巣穴で行われ、孵化した幼生は翌年の春に巣穴から河川中へ分散していく。水生昆虫などを食べて成長し、大きくなると口に入るサイズの動物を広く食べるようになる。冬季は活動が鈍るものの冬眠はしない。日本固有種。

特記事項 特別天然記念物、国際希少野生動植物種。板櫃川水系および遠賀川水系でも過去に複数回の記録があるが、繁殖していたかは不明。



撮影：江頭幸士郎

ヤマアカガエル

Rana ornativentris Werner, 1903

絶滅危惧ⅠB類(EN)

2014
絶滅危惧Ⅱ類環境省
—

選定理由 山地や里山環境に棲むカエルで、県内では依然として広範囲から記録があるものの、各地で近年明らかに数を減らした個体群が見受けられる。繁殖に際しては、安定した池沼や湿地以外にも流動的な水田などに依存しているが、そうした産卵場所の環境変化に加え、外来種のアライグマなど獣類による食害を受けた個体もみつかっている。

危機要因 湿地開発、土地造成、ため池改修、管理放棄、遷移進行、乾田化、外来種侵入(アライグマ、アメリカザリガニなど)

分布情報 北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、北九州市八幡西区、福岡市西区、久留米市、飯塚市、八女市、豊前市、筑紫野市、大野城市、太宰府市、古賀市、うきは市、嘉麻市、朝倉市、糸島市、那珂川市、宇美町、東峰村、広川町、添田町、みやこ町、上毛町など

種の概要 体長4~8cmでアカガエル各種に似るが、下唇や喉に顕著な暗色斑をもつこと、背側隆起の前縁が外側に折れ曲がることなどで区別できる。森林内で生活し、冬から早春にかけて溝や池、湿地に大型の卵塊を産む。孵化した幼生は初夏頃に変態する。ニホンアカガエルと同所的に産卵していることがある。日本固有種。

特記事項 —



撮影：江頭幸士郎

カスミサンショウウオ

Hynobius nebulosus (Temminck et Schlegel, 1838)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2014
絶滅危惧Ⅱ類環境省
絶滅危惧Ⅱ類

選定理由 今回の調査により前回を上回る地点で生息が確認できたが、前回調査時よりも生息する森林や産卵場所となる湿地環境の減少あるいは劣化が進んでいる。また近年、県内では外来種アライグマが急速に分布を拡大しており、本種はその食害の被害を受けるなど、決して楽観視できる状況にはないと判断し絶滅危惧Ⅱ類とした。

危機要因 外来種侵入(アライグマ、アメリカザリガニなど)、遷移進行、管理放棄、土地造成、その他(メガソーラー開発など)

分布情報 北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市戸畑区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、北九州市八幡東区、北九州市八幡西区、福岡市西区、大牟田市、久留米市、直方市、飯塚市、田川市、行橋市、中間市、宗像市、太宰府市、古賀市、福津市、宮若市、嘉麻市、糸島市、篠栗町、新宮町、久山町、芦屋町、水巻町、岡垣町、遠賀町、小竹町、鞍手町、桂川町、東峰村、添田町、糸田町、川崎町、大任町、赤村、福岡町、みやこ町

種の概要 主に丘陵地の森林に生息する小型の止水性サンショウウオ類。県内の繁殖期は1~4月にかけてで、林内や林縁部、ため池奥の湿地にできた水溜まりや水路の底の落ち葉や石などに1対の卵囊を産みつける。孵化した幼生は3~4か月で変態上陸し、上陸後は林床の土壤動物を食べて成長する。飼育下では孵化後3年で成熟し産卵した。日本固有種。

特記事項 2018年以前は九州から本州、四国にかけて生息する広域分布種とされていたが、現在では九州の個体群のみがカスミサンショウウオとされる。北九州市北部から行橋市などに生息する個体群は遺伝子解析の結果、山口県西部などに生息するヤマグチサンショウウオ種群の遺伝子浸透が見受けられ、他地域の個体群とは明らかに異なる遺伝型を示した。この事はかつて九州と本州が陸続きであった時代に両種間の遺伝的交流があった事を示唆しており、生物地理学的に特筆すべき個体群と言える。特定第二種国内希少野生動植物種。



撮影：川原二郎

アカハライモリ

Cynops pyrrhogaster (Boie, 1826)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2014
準絶滅危惧環境省
準絶滅危惧

選定理由 県内での生息地点はまだ比較的多いが、個体数の大きな減少が見受けられる地点がある。小型サンショウウオ類各種が特定第二種国内希少野生動植物種に指定され売買が禁止されるなか、本種は規制対象外で自由に取引できるため、販売目的の乱獲のおそれがあること、また近年、増加している外来種アライグマによる捕食圧の影響を考慮し、絶滅危惧Ⅱ類とした。



撮影：川原二朗

危機要因 乱獲、外来種侵入（アライグマ、アメリカザリガニなど）、遷移進行、管理放棄、土地造成、その他（メガソーラー開発など）

分布情報 北九州市門司区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、北九州市八幡東区、北九州市八幡西区、福岡市南区、福岡市西区、福岡市早良区、大牟田市、久留米市、直方市、飯塚市、田川市、八女市、行橋市、豊前市、筑紫野市、大野城市、宗像市、太宰府市、福津市、うきは市、宮若市、嘉麻市、朝倉市、糸島市、那珂川市、宇美町、須恵町、岡垣町、鞍手町、桂川町、筑前町、東峰村、香春町、添田町、大任町、赤村、みやこ町、上毛町、築上町

種の概要 山間の水田や細流、用水路、ため池などの水辺で見られることが多いが水辺付近の林床からもみいだされる。繁殖期は4月頃から始まり、雌は卵を一粒ずつ水中の落ち葉や水草の葉などに包んで産みつける。孵化後約2か月ほどで変態上陸し、幼体は森林の林床で土壌動物を食べて成長する。日本固有種。

特記事項 —

ニホンヒキガエル

Bufo japonicus Temminck et Schlegel, 1838

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2014
絶滅危惧Ⅱ類環境省
—

選定理由 産卵場所の減少などにより平野部ではほとんどみられなくなったが、山林には広く分布する。産卵に適した比較的浅い水域や繁殖期にも分布のある水田が減少している。ため池で産卵する場合もあるが、その場合は幼生がブルーギルなどの外来種に食害される例が観察される。また繁殖期には道路で轢死する個体が目立つほか、全国的にインターネットオークションなどで野生個体が取引される事例が多くみられる。



撮影：鶴川 亮

危機要因 湿地開発、土地造成、ため池改修、管理放棄、遷移進行、乾田化、外来種侵入（ブルーギルなど）、その他（轢死）

分布情報 北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、北九州市八幡東区、北九州市八幡西区、福岡市南区、福岡市西区、福岡市城南区、福岡市早良区、大牟田市、久留米市、直方市、飯塚市、田川市、八女市、行橋市、小郡市、筑紫野市、春日市、大野城市、宗像市、太宰府市、古賀市、福津市、うきは市、宮若市、嘉麻市、朝倉市、みやま市、糸島市、那珂川市、篠栗町、岡垣町、鞍手町、東峰村、広川町、添田町、みやこ町、上毛町など

種の概要 地上生活をする大型のカエルで、体長は10cmを越す。体表は乾いた質感をしており、多数の小隆起が散在する。鼓膜の上に分泌腺の集中した耳腺をもち、危険に際しては毒成分を含んだ粘液を分泌する。体色は黒味がかったものから赤褐色まで変異が多い。早春に水中に長い紐状の卵塊を産み、孵化した幼生は5月頃に変態する。日本固有種。

特記事項 —

ニホンアカガエル

Rana japonica Boulenger, 1879

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2014
絶滅危惧Ⅱ類環境省
—

選定理由 山地や里山環境に棲むカエルで、ヤマアカガエルよりも低標高を好む傾向にある。繁殖に際しては、安定した池沼や湿地以外にも流動的な水田などに依存しているが、そうした産卵場所の環境変化に加え、外来種のアライグマなど獣類による食害を受けた個体もみつかっている。他方、ビオトープなどの人為的に造成された環境にも定着する例がみられる。



撮影：鶴川 亮

危機要因 湿地開発、土地造成、ため池改修、管理放棄、遷移進行、乾田化、外来種侵入（アライグマ、アメリカザリガニなど）

分布情報 北九州市門司区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、北九州市八幡東区、北九州市八幡西区、福岡市西区、大牟田市、久留米市、直方市、飯塚市、行橋市、宗像市、古賀市、福津市、宮若市、糸島市、那珂川市、久山町、糸田町、みやこ町など

種の概要 体長3~7cmでアカガエル各種に似るが、下唇や喉に目立つ暗色模様をもたないこと、背側隆起の前縁が折れ曲がらないことなどで区別できる。森林内や草地で生活し、冬から春にかけて溝や池、湿地にやや大型の卵塊を産む。孵化した幼生は初夏頃に変態する。ヤマアカガエルと同所的に産卵していることがある。日本固有種。

特記事項 —

トノサマガエル

Pelophylax nigromaculatus (Hallowell, 1861)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2014
絶滅危惧ⅠB類環境省
準絶滅危惧

選定理由 水田域のカエルで、特に平野部ではかつて大きく分布が縮小したが、山沿いや山間部では現在は個体数が安定しているようである。ただし、今後さらなる水田の放棄などが進めば、そうした地域の個体群も減少するおそれがある。幼体や成体の生息に適した水路の減少や、水田と草地、林地との接続が断たれるなどの環境変化に影響を受けやすいようである。

危機要因 湿地開発，土地造成，ため池改修，管理放棄，乾田化，水路改修

分布情報 北九州市小倉南区，北九州市八幡東区，北九州市八幡西区，福岡市早良区，大牟田市，飯塚市，田川市，八女市，筑後市，筑紫野市，古賀市，うきは市，宮若市，嘉麻市，朝倉市，みやま市，糸島市，那珂川市，久山町，岡垣町，桂川町，東峰村，添田町，みやこ町，上毛町など

種の概要 体長4～9cmで体格の良いカエル。あまり水辺を離れることはなく、池沼や水田、それらに接続する水路や小川、そしてそれを囲む草地や林地で暮らす。初夏に水田や湿地に大型の卵塊を産む。幼生は夏の間に変態し、昆虫などの小動物を捕食する。国外では朝鮮半島や中国などに分布。

特記事項 —



撮影：鶴川 亮

コガタブチサンショウウオ

Hynobius stejnegeri Dunn, 1923

準絶滅危惧(NT)

2014
絶滅危惧Ⅱ類環境省
絶滅危惧Ⅱ類

選定理由 県内では企救山地，古処山地，福智山地，英彦山地，釈迦岳山地にのみ分布記録があり，同所的に分布することもあるチクシブチサンショウウオと比べ分布域は狭い。また前回調査では確認されていた田川郡の赤村では今回全く確認できなかった。砂防ダムの建設や林道開発の影響が懸念される地点も認められる一方，福智山地では生息地点，個体数ともに多く，また企救山地でも新たな生息地点が複数みつかったことなどから絶滅の危険性は以前想定されていたより低いと判断し準絶滅危惧とした。

分布情報 北九州市門司区，北九州市小倉南区，北九州市八幡東区，北九州市八幡西区，直方市，八女市，朝倉市，香春町，添田町，福智町，みやこ町



撮影：川原二郎

チクシブチサンショウウオ

Hynobius oyamai Tominaga, Matsui et Nishikawa, 2019

準絶滅危惧(NT)

2014

—

環境省
絶滅危惧Ⅱ類

選定理由 県内では脊振山地を除く古処山地，福智山地，英彦山地，三郡山地，貫山地，釈迦岳山地に広く分布。砂防ダムの建設や林道開発の影響が懸念される地点も認められる一方，前回調査では記録のなかった地域からも生息が確認され，その生息状況も比較的良好とみられることから，準絶滅危惧とした。

分布情報 北九州市小倉北区，北九州市小倉南区，北九州市八幡東区，北九州市八幡西区，直方市，飯塚市，八女市，豊前市，筑紫野市，宗像市，古賀市，福津市，宮若市，嘉麻市，朝倉市，篠栗町，久山町，岡垣町，東峰村，香春町，添田町，赤村，福智町，苅田町，みやこ町，築上町



撮影：川原二郎

ブチサンショウウオ

Hynobius naevius (Temminck et Schlegel, 1838)

準絶滅危惧(NT)

2014
準絶滅危惧環境省
絶滅危惧IB類

選定理由 県内に生息する小型サンショウウオ類の中で最も分布域が狭く、県西部の脊振山地にのみ生息する。一部の生息地周辺での風力発電の建設計画や幼生の個体数が極めて少ない地点があるなど、懸念すべき点がある。しかし佐賀県との県境にまたがって分布し県内側の分布域での生息地点は多く、個体数も決して少なくはないと判断し準絶滅危惧とした。

分布情報 福岡市西区，福岡市城南区，福岡市早良区，筑紫野市，糸島市，那珂川市



撮影：川原二郎

ツチガエル

Glandirana rugosa (Temminck et Schlegel, 1838)

準絶滅危惧(NT)

2014
準絶滅危惧環境省
—

選定理由 もともと水田域に多くみられるカエルであったが、水路の改修や水田管理形態の変遷などにより数を減らしている。本種は幼生で越冬するため、冬期に水路が枯渇する地域で大きく減少しつつあるほか、夏季に中干しをする水田などでは生息が難しい。他方、密度はそれほど高くないながら河川や溪流沿いでも繁殖することがある。県北から中部には比較的広く産地があるが、南部の記録が乏しい。日本固有種。

分布情報 北九州市門司区，北九州市小倉南区，北九州市八幡東区，北九州市八幡西区，福岡市早良区，大牟田市，八女市，豊前市，宗像市，古賀市，うきは市，朝倉市，上毛町など



撮影：江頭幸士郎

カジカガエル

Buergeria buergeri (Temminck et Schlegel, 1838)

準絶滅危惧(NT)

2014
準絶滅危惧環境省
—

選定理由 主としてダムの建設や河川改修により産卵場所となる山地溪流域が縮小または消失し、全体的に産卵環境が悪化している。特に兩岸および水底の補強工事などによる影響を強く受けるようである。生息地は散在的で、県東部や西部の山地河川に比較的多い。日本固有種。

分布情報 北九州市小倉南区，北九州市八幡東区，北九州市八幡西区，福岡市早良区，八女市，豊前市，うきは市，宮若市，朝倉市，那珂川市，東峰村，添田町，上毛町など



撮影：鶴川 亮